

附属図書館の現状と将来

寺田 弘

現在の附属図書館はどうなっているか

ご承知のように徳島大学には常三島地区に本館が、蔵本地区には分館が設置されています。大学図書館は学生と研究者とを対象にして、過去から現在に至る文化的・学術的情報を提供することを主たる業務にしています。しかし、それらは画一的なものではなく、利用者層の違いによって業務内容の重点の置き所が異なってくることはいうまでもありません。本館では共通教育を履修する学生の利用が多いので、どちらかといえば教養書の占める割合が多く、また、蔵本分館は相対的に研究者層の利用が多いので、専門書の比率が高くなっています。

大学図書館では、学術図書の収集ばかりでなく、多様な学術ジャーナルを長年にわたって系統的にそろえることが重要です。本学の図書

館、特に蔵本分館の学術ジャーナルは種類の多さばかりでなく、収集の継続性においても全国的にトップレベルにあると思います。しかし、最近の円安と印刷代の高騰による価格の上昇に悩まされています。そのために新しいサイエンスの誕生を反映した学術ジャーナルの購入が思うように進まないばかりでなく、従来から収集していたジャーナルを継続的に購入することも難しくなっているのは悲しい現実です。ジャーナル購入のための新しい方法を検討中です。

また、蔵本地区はライフサイエンスに関連する学部、研究施設が集中していますので、「蔵本分館」に代わって「生命科学図書館」という名を冠したいとの提案がなされております。このように本館と分館とでは、若干異なった性格を持っていますが、これらに整合性を持たせ、両

地区の実情を反映した形で図書館活動を発展させることが、これからの附属図書館の大きな課題になります。

図書館のホームページで多様な情報を

現在の図書館の進むべき方向の一つに「電子図書館」としての機能の充実があげられます。

これの是非に関しては別項で考えてみたいと思いますが、ここではその一環として図書館のホームページが4月から開設されたことをお知らせしたいと思います。ホームページからどのような情報が得られるかは、徳大広報や図書館報「すだち」の本号にも紹介されていますので、その詳細に関してはここでは触れないことにします。

ただ、ここで強調したいことは、ホームページを活用していただくと、研究室に居ながら過去、現在そして近未来の世界中の学術情報を手にすることができるということです。さらに、到着が待ち遠しいジャーナルの受け入れ状況や最新の購入書籍名ばかりでなく、学術ジャーナルへの投稿規定も知ることができます。大いに活用していただきたく思います。



マルチメディア・プラザ オープニングセレモニー
中央、左から寺田館長、三浦局長、斎藤学長

小さくても大きな

“マルチメディア・プラザ”

図書館に関するもう一つのトピックスは、去る4月16日に本館に開設された「マルチメディア・プラザ」でありましょう。広さ50平方メートルばかりの、プラザというには一寸気がひける広さですが、そこに設置されているパソコンを用いることにより、ホームページを介して多種多様な世界の情報を瞬時にして知ることができます。現在のところ、このプラザは好評のようで、大勢の利用者で盛況です。昼休み時間などは数人のグループによる利用が目立ちます。学生諸君をはじめ多くのユーザーの目がこのプラザから世界へと開かれることを期待しております。キーボードを叩けよ、さらば開かれんということなのです。

電子図書館の将来は？

コンピューターの発達とともに、最近強調されているのは電子図書館的機能を備えることです。今やコンピュータの助けを全く借りずに科学研究を行うことは不可能であると言っても過言ではありません。

書籍を管理する立場にある図書館からみた情報の電子化の最大の利点は、省スペース化にあります。分厚い大辞林や百科事典が一枚のコンパクトディスクに収納されてしまうのですから、狭い収納スペースに悩まされている図書館にとってそのメリットは計りしれないものがあります。その上電子化された情報は検索機能が優れていますので、必要な書籍を見つけだすためにも大きな助けになります。また、図書館に來れない場合にも、研究室や自宅ひいては通勤途上でもホームページを介して、すぐさま必要な情報を得ることができるのですから、「24時間稼働の居ながら図書館」とか、「壁のない図書館」と言われるゆえんです。

しかしそうになると、学術情報にはどのような

ものがあり、どのようにしたら情報検索を行うことができるのか、そしてどのようなことに得られた情報を利用できるのかといった情報利用に関する「リテラシー教育」を学生や初歩的な研究者を対象に行う必要が出てきます。各学部でそのような教育システムを積極的に取り入れてくださることを切望いたします。図書館員は出番を待っているのです。

書籍は将来消えてしまうのであろうか

情報の電子化のみがクローズアップされてしまうと、もうペーパーバージョンとしての書籍は近い将来に無用なものになってしまうのではないかという考えが出てきても不思議ではありません。

そうなると図書館の仕事は「情報センター」と同じことになってしまいます。確かに、図書館の取り扱っている学術情報の中で、電子化された情報の占める割合は確実に増大していくでしょう。近い将来には、既存の情報センターとの機能の融合と再構築を考慮しないといけなくなることは間違いないと思います。

しかし、長年「紙の文化」に支えられたペーパーバージョンとしての書籍の収集は依然として図書館の役割のなかで重要であると思います。ペーパーバージョンの最も重要な点は、そこに印刷されている情報（と文化）を実感できるという安定感に支えられています。ずっしりとした重量と、すべすべとした紙の肌触りは充実感そのものといえます。

現在、学生も含めて多くの人々がワープロ専用機やパソコンをワープロとして日常的に用いています。しかし、ごく一部を除いてはそれらは紙に印字されたものを読むために、情報を入力しているのです。音や動画が出てくるようにまでなった電子本などの人気に今ひとつ盛り上

りを欠いているのも、その辺りに原因がありそうです。ハード面でもディスプレイを書き込むための補助手段としてではなく、読むために不可欠な手段にする工夫が必要です。

また、電子化された情報の安定性にも考慮する必要があります。サンドラ・ブロックが主演したザ・インターネットという最近の映画は、彼女の魅力ばかりでなく、電子化された情報が容易に改変されてしまうという恐怖を如実に示したものであります。

開かれた図書館を情報の発信基地に！

図書館を巡る新しい流れに主題をおいて、図書館の将来を考えてきました。情報の電子化は好むと好まざるとにかかわらず、ある組織体の垣根を取り払う役割を果たすことになるでしょう。電子化という黒船が開国を迫っているのです。

大学の図書館も、地域の中で生き生きと活動することを考えていかなければならない時代に入ってきました。そのためには、まず、図書館を市民にもっと利用していただく必要があります。利用のための手続きを簡便にしたのもその一つの方策ですが、できれば大学に学び働くわれわれが、市民の文化に対するエネルギーを吸収し、新しい創造への糧にしたいと思います。

多様な情報は収集するのが目的なのではなく、それらを創造活動に活用することが重要なことです。図書館はあくまでも材料と作業場所の提供者です。それらの材料を用いて、何をどのようにして料理していくかは、それぞれの目的と力量により異なってきます。図書館を活用して、徳島大学を新しい科学の情報発信基地にさせていただきたく思います。

(てらだ ひろし・附属図書館長)



文献・引用・図書館

—ユージン・ガーフィールドの仕事—

窪田輝蔵

情報の再生と発見

図書館は研究者の情報要求に応えなければならない。そのために資料を整理分類して蓄積し、要求に応じて取り出し提供する。すなわち情報の再生（リカバリー）である。さらに図書館に期待されている仕事に情報の発見（ディスカバリー）がある。未知の文献をキーワード、抄録、件名等で探していく手だてを備えていなければならない。この情報の再生と発見という図書館にとっての基本的な機能を支援するため、引用という鍵を使ってサイテーション・インデックスというユニークな索引誌を作り出したのが、ISI (Institute for Scientific Information) の創設者ユージン・ガーフィールド博士であった。引用索引は図書館に対して二つの重要なインパクトを与えている。一つは、製作するとき索引の専門家が関与しないという点であり、もう一つは、検索のとき分類その他の専門知識や技術を必要としないという点である。

サイテーション・インデックス

(Citation Index = CI)

CIは引用している論文と引用されている論文との間には主題関連性があるということを前提にしている。そしてこの主題関連性は、他にもない、引用している著者自身が指示しているのであって、そこに索引をする第三者は入り込めない。分類するとか件名を付けるとかの作業は、著者が引用したという事実によってすでに別の形ではあるが、なされてしまっている。だから、制作課程は極めて機械的である。第三者が介在しないということは、一方で索引者の個

性や能力による曖昧さを回避できるという良さがあるが、他方で、引用する者の恣意が入り込んでくる弱点も抱えることになる。

CIで文献検索をするのは簡単である。研究者は自分のテーマを扱っている既知の論文を手がかりとして、検索を始めればよい。分類、キーワード、件名とかの予備知識はまったく不要である。同僚や指導者が発表した論文が手元があればそれでいい。その論文を引用した論文群をいとも簡単に引き出すことが出来る。ここでも文献検索については素人の研究者が直に調査に取りかかることができるというメリットがある一方で、引用という、それによって検索をするということを用意していない作業に依存するという危うさがある。

インパクト・ファクター

(Impact Factor=IF)

ガーフィールドの作ったCIは、さまざまな批判と賛同に迎えられて、世界の市場に定着していった。その制作の過程で、いわば副産物的に論文間の引用・被引用のデータが蓄積されていくと、彼はそのデータベースのもつ新しい可能性に着目して、いろいろなアルゴリズムを考えては、データ分析を試み、次々と斬新なレポートを発表した。その一つがインパクトファクターであった。

インパクトファクターはサイエンス系の研究者の間でよく話題になる。文字どおりに解釈すれば「衝撃度」あるいは「影響度」いうことになるが、ここでいうインパクトファクターは、影響の度合いというような一般名詞としてのインパクトファクターではなく、英語式にいうと



定冠詞 The をつけた固有名詞としての Impact Factor (IF) で米国の ISI 社が公表しているもののことをいっている。その ISI 開発になる IF とは何かを十分理解しないままに使われているケースが散見されるので、ここで確かめておこう。ISI は IF を以下の式で算出している。

$$\frac{A}{B} = \text{IF}$$

A = 調査対象雑誌に掲載された論文の前 2 年間の被引用数

B = 調査対象雑誌に掲載された同 2 年間の全論文数

この式から分かるように、IF は雑誌について言われており、しかも 2 年という期間を区切って算出している指数なのである。であるから、個々の論文の評価や個人の業績を直接的に示しているものではないし、年々変動するものである。表 1 は著名なサイエンス・ジャーナルの IF である。

表 1 IF による雑誌ランキング

(分野：科学全般)

順位	雑誌名	被引用数	IF
1	Nature	257,287	27.047
2	New Eng. J. of Medicine	103,033	22.412
3	Science	203,375	21.911
4	Lancet	89,957	17.490
5	Proc. Nat. Acad. of Sciences. U.S.A.	268,077	10.520

JCR 1995 CD-ROM サイエンス版より

インパクトファクターの誤用

トップにランクされている「Nature」について言えることは、1994 - 95 年に発表した論文や記事が 1996 年に平均約 27 回引用されたということを示しているだけである。個々の論文や記事がすべて 27 回引用されたということは一言も言っていない。だから、IF をそのまま個人や論文の評価に使うには相応の断りと配慮が必要

要である。

IF が 25 の雑誌に論文を一編発表すると 25 点、さらに 20 の雑誌に 2 編出ると 40 (20 × 2) 点と加算し、合計 65 点を研究者の評価点にするということが行われている例があるが、少なくとも ISI の IF の用例としては誤りである。どうしても IF を個人の業績評価に使いたければ、個々の論文の被引用数を調べて IF に対する偏差値を見るほうがより現実的である。

たとえば 1994 年に「Nature」に載せた論文が 1995 年の「Nature」の IF、27 を超える引用数を得ることが出来たら、その論文の偏差値は高いということになるし、27 以下であれば低いということになる。ただしこの場合も注意が必要である。IF はその雑誌に掲載されたものすべてを、原著論文やレビュー等という記事種類を区別せずに積算しているから、タイプの異なるものを比較するという危険が付きまとうし、学問分野によって引用パターンが変わる（数学は概して引用が少なく、生命科学は全体的に多い等）ということもあるから、純粋数学の老教授と若い分子生物学研究者の被引用数を直接比較するのは避けなければならない。

図書館とインパクトファクター

図書館にとって IF はどんな意味を持っているであろうか。

何よりもまず購入雑誌の選定に一つの判断基準を与えてくれるということを挙げる事が出来る。ISI は「ジャーナル・サイテーション・レポート」(Journal Citation Report = JCR) (図 1) を発行している。この雑誌引用関係表は、表 1 のように IF による雑誌の重要度ランキングを示すだけでなく、どの雑誌がどの雑誌によって多く引用されているかを示す指標も含んでいる。この雑誌間の引用関係表を見ることによって、雑誌間のテーマの親近性が分かるだけでなく、図書館員にとっては、たとえば、雑誌 A の雑誌 B との関係は雑誌 Z との関係よりも濃い、



あるいは薄いということが分かって、雑誌Aを購入すれば、複写要求はZよりもBにより多く集まるということを予測できることになる。

雑誌の選定委員会はこれまでもっぱら教員が主導権を握っていて、研究上の必要性が選定の基準になっていた。これにISIのJCRは雑誌間引用関連度という計量的見方を新たに加えたのである。しかも重要なことは、この指標を使うために特に科学的専門知識を必要としない、いわば科学の素人にも扱えるという点である。

最近では、雑誌の新規購入要求があるとIFを調べる図書館が多くなった。また、JCRで引用関連度を調べて、現購入雑誌との関連度が極端に薄い、限定的なテーマを扱う孤立的な雑誌の要求には応じないという方針を立てている図書館もある。これらは、ルールとして明文化されてはなかったが、今までも選定の常識として実施されていた。それがJCRの出現によって、選定の理由と根拠をデータで示せるようになった。少なくともJCRやIFによって雑誌選定における図書館員の発言権が増し、その発言の根拠を具体的に示せるようになったのである。ガーフィールドは図書館に武器を提供したといえる。

Impact Factor	Cited Journal	Number of times articles published this year were cited in 1996							
		All	1996	1995	1994	1993	1992	1991	1990
	All Journals	9814	110	618	912	626	572	626	591
7.452	J BIOL CHEM	600	9	46	70	52	53	35	49
1.901	J BIOCHEM-TOKYO	561	33	83	60	39	30	39	26
2.430	BIOCHIM BIOPHYS ACTA	357	0	7	36	23	17	26	22
4.818	BIOCHEMISTRY-US	304	2	13	21	12	8	17	14
3.275	EUR J BIOCHEM	253	5	11	27	14	18	16	8
2.872	BIOCHEM BIOM RES CO	234	10	25	31	10	11	14	20
0.913	BIOSCI BIOTECH BIOCH	208	3	9	10	11	19	5	6
3.750	FEBS LETT	172	2	19	21	17	11	9	8

図1 ジャーナル・サイテーション・レポート (Journal Citation Report=JCR)

ガーフィールド博士の仕事

科学者は引用によって自分の論文と先行する論文を関係づけている。それは図書館学でいう

分類的な関係付けではない。論文の内容から生ずる科学そのものからくる関係である。したがって、CIのデータを分析すると、一つのテーマに群がる研究者群を見つけ出すことが出来る。また、どのテーマにどれだけ引用が集まっているかという引用関係の密度を調べれば、「研究の最前線」とでもいべき主題を見つけ出すことも出来る。ガーフィールド博士が「研究の最前線」を発表すると、どの分野の研究をより促進すべきかを判断する資料として、全米科学財団が利用するようになった。

多く引用された著者や論文はそれだけ多く研究に貢献した、あるいは影響を与えたということ的前提にすれば、「最も多く引用された著者」とか「最も多く引用された論文」とかのリストを作ることも出来る。ISIが発表するこれらのレポートはしばしばニューヨークタイムズ等のメディアにも取り上げられることがある。

引用を調べることによって、科学者の業績を比較したり、学問研究そのものを分析したりすることを可能にしたのはガーフィールド博士の功績である。彼の引用分析手法が教えてくれるものはこれにとどまらない。国レベルの被引用数による日本の科学貢献度や国際的地位等、国の科学政策立案に欠かせない基礎データ、大学教員や科学者個人の業績評価や研究費配分の客観性と透明性の裏付けという、今日の日本の科学が問いかけている課題に客観的に答えるためのデータがある。これらはガーフィールド博士がISIを通してわれわれに語りかけているメッセージなのである。

(くばた てるぞう・科学技術評論家)

本稿は平成9年12月5日に附属図書館が開催した学術情報に関する講演会の講演要旨です。

マルチメディア・プラザ オープン

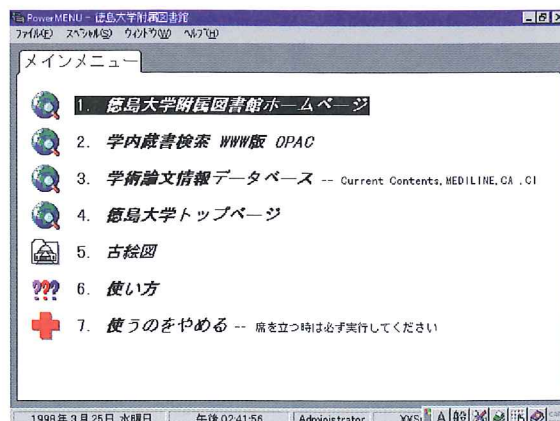
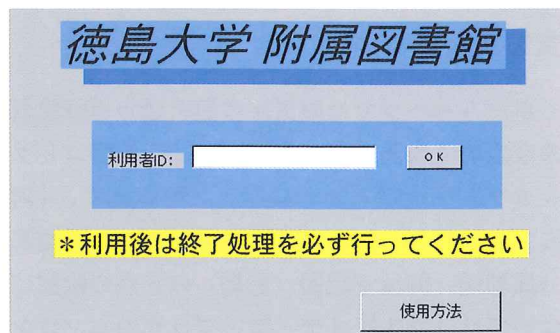
情報サービス課

インターネット情報源にアクセス

附属図書館では4月16日、本館2階のサービスカウンターに近い約50㎡のフロアにクライアントサーバ方式の利用者端末10台を備えたマルチメディア・プラザをオープンし、翌17日から学内外へ公開しました。OSはサーバ、クライアントともにWindows NTを採用し、端末(Pentium II, 233MHZ)からはキーボード入力とマウス操作でアクセスします。

このプラザは、規模は小さいながらも、電子図書館的機能の充実・強化の一環として、館内にインターネット情報源にアクセスできるオープンスペースを整備したものです。グループでも楽しめる利用環境にするため、OAデスクのデザインや配置にも工夫をしました。

アクセスできる基本メニューは図書館と大学



のホームページ、OPAC、ERL、CA & CIの学内情報検索です。また、端末の1台で、貴重資料の「阿波国大絵図」等6点について、インターネットでは実現できない超高精度画像を閲覧できるようにし、活用のために画像ソフト(Photo Shop)の利用ガイドを提供しています。

運用管理ソフトの開発

本システムの特徴の一つは、円滑な運用を行うため、管理ソフトを開発したことです。

主な機能は、タイムスケジュールによる端末の自動オン・オフ(グループ化した電源制御が可能)、トラブルが発生した場合の対策として、端末のシステム環境を基本システムに自動復旧するセルフメンテナンスシステム、ウイルス対策等です。利用面では、利用者のセルフサービス化を促進するため、利用者メニューを作成しました。写真のように、初期画面を利用者IDの入力画面とし、図書館利用証の利用者IDを入力してログオンすると、メニュー画面がたちあがります。

オープニングセレモニー

4月16日午後4時から、本プラザの開設披露式を開催し、斎藤学長・寺田館長・石村分館長・三浦局長をはじめ教職員約40人が出席、式の後、情報サービス課職員のインストラクションで検索システムの体験会が行われました。

この様子は、当日夕方の四国放送のTVニュース「フォーカス徳島」および朝日新聞・徳島新聞朝刊など地元のマスコミにより報道されました。特にOPACによる蔵書検索の公開、学外の一一般市民等への直接利用公開に高い関心が寄せられました。



図書館ホームページを開設

図書館では昨年10月にホームページ試行版を開設していましたが、全面的に内容を改め、10年4月から公式版を開設しました。URLは「<http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/>」です。

主な目次

ホームページのメニューは、次の9ページにトップページを掲げていますように、4つの柱で構成されています。主な内容を紹介します。

○新しい情報

新しいサービスの開始や利用のニュース等がのります。

○文献情報

オンラインで学内をはじめ国内外図書館の蔵書検索、電子ジャーナル、学术论文の検索、出版情報の検索等ができます。

・学内蔵書検索 (OPAC)

新着雑誌の検索の方法はホームページの新着雑誌ヘルプを参照してください。

・電子ジャーナルは本学で購読している雑誌の付加サービスとして、現在オンラインの全文テキストを無料で見ることのできる雑誌のリストです。

・NACSIS Webcat

全国の大学図書館の所蔵する図書、雑誌について、書誌と所蔵の検索が簡単にできます。

・学术论文情報データベース (学内のみ)

・Current Contents (理工系自然系)

・MEDLINE

・CA on CD (Chemical Abstracts)

・CI on CD (Collective Index)

・MEDLINEは、インターネットで無料で

情報サービス課学術情報係

提供されているPubMedをリンクしています。遡及データのすべてを検索でき、カレントデータの更新頻度はweeklyです。
・学術雑誌投稿規定関係をリンクしています。

○徳島大学附属図書館のご案内

本館及び蔵本分館について、学内の利用者、学外の利用者への利用案内をしています。学内の教官への利用案内もあります。また、貴重資料の利用案内と貴重資料の紹介を載せています。

○リンク集

他大学・機関図書館のサーバ、サーチエンジン等をリンクしてあります。ネットサーフィンに利用してください。

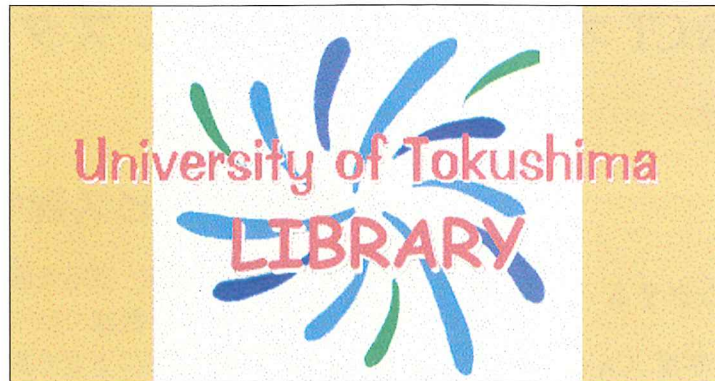
貴重資料について

ホームページでは附属図書館所蔵の「蜂須賀家臣成立書並系図」「近世古地図・絵図コレクション」を画像とともに紹介しています。「阿波国大絵図(2点)・淡路国絵図(2点)、勝浦郡分間郡図、御城下絵図(徳島)の6点の絵図については、マルチメディア・プラザのパソコンで150MBの超高精度画像の閲覧ができます。

ホームページの運用について

平成9年度に策定した広報に関する方針に基づいて、内容編成、公開等については広報委員会が定め、原稿の作成、電子化は「インターネット広報実施要項」に基づいて広報内容の業務担当係がそれぞれ技術研修をしながら作成、更新しています。





徳島大学附属図書館

- 新しい情報 (What's New 1998年5月7日更新)
- 文献情報
 - *学内蔵書検索
 - WWW版 OPAC
 - ショートヘルプ・新着雑誌ヘルプ
 - 購読雑誌リスト 常三島地区 蔵本地区
 - 電子ジャーナル
 - *学外蔵書検索
 - 全国大学図書館蔵書検索 (NACSIS Webcat)
 - Library of Congress (米国議会図書館)
 - British Library (英国図書館)
 - 国立国会図書館
 - *学術論文情報データベース
 - Current Contents (WebSPIRS 学内のみ)
 - MEDLINE (WebSPIRS 学内のみ)
 - CA on CD (Chemical Abstracts) (学内のみ)
 - CI on CD (Collective Index) (学内のみ)
 - UnCover
 - 学術雑誌投稿規定関係
 - *出版情報
 - 日本書籍総目録
 - 日本図書流通センター
 - 日本の出版社
 - 世界の出版社
 - Elsevier
 - Springer-Verlag
- 徳島大学附属図書館のご案内
 - お知らせ
 - 利用案内 本館 (常三島地区) 蔵本分館
 - 利用案内 (学外の利用者) 本館 (常三島地区) 蔵本分館
 - 業務案内 本館 (常三島地区) 蔵本分館
 - 館報
 - 貴重資料 利用案内・紹介
- リンク集 (他の情報機関等へのご案内)
 - 他大学・機関図書館のサーバ (東京工業大学)
 - 徳島大学トップページ
 - サーチエンジン Yahoo! JAPAN・goo・AltaVista
 - 国立大学図書館協議会
 - 文部省



CA & CI オンラインサービス スタート

CA & CI サービスシステム

図書館では平成9年度、CA on CD (Chemical Abstracts)、CI on CD (Collective Index) の Windows NT サーバシステムを導入し、今年度4月17日よりオンラインサービスでの提供を開始しました。提供メニューは次のとおりです。

- CA on CD [1997以降]
- CI on CD 12th[1987～1991]
- CI on CD 13th[1992～1996]

データベースの内容と冊子情報

- 生化学、物理・無機・分析化学、応用化学・化学工学、高分子化学、有機化学等幅広い科学技術分野の情報が収録されています。
- 収録源は雑誌論文、特許、技術レポート、学位論文、学会会議録、書籍等です。
- CA on CD データは毎月更新されると同時に索引情報も更新されます。
- Chemical Abstracts の冊子体は、vol.1[1907]～89[1978]は本館で、また vol.20[1926]～(継続中)は蔵本分館で見ることができます。
- CI(Collective Index)に関しては、冊子体を1907年創刊から1986年まで、蔵本分館に所蔵しています。オンラインによる検索と合わせると創刊からの既刊すべてが検索できることになります。

検索機能の特色

- 検索にあたっては利用するデータベースを一覧表から選択できます。
- 検索手段としては標題、特許番号、分子式、抄録、CAS 登録番号などがあり、ほぼすべて

情報サービス課学術情報係

の情報が検索・表示可能です。

- Index Browse 機能では一度に20までの検索語を選択することができます。
- Index Browse 機能では、複数の検索語を選択した場合、すべての語の論理和 (OR) とみなされます。これにより、さまざまな綴りで入力されている著者名や、語の単数形と複数形を同時に選択することができます。
- 化学物質および分子式の Hierarchy 表示では CAS 登録番号も合わせて表示されます。
- 印刷の形式は、全情報、書誌情報+抄録の3種類から選択できます。
- 質問式は後の利用のために保存しておくことができます。
- CI on CD データは、5年分の Index が同時に検索できます。その結果により、冊子体の Chemical Abstracts を参照してください。

利用手続き

教室または講座ごとに user ID を発行しています。所定の申込用紙で申し込んでください。

附属図書館ホームページに詳しい案内をしていますのでご利用ください。

CA & CI on CD の入力画面

検索可能なオンラインデータベース

	システム名	情報提供機関	内 容
1	Current Contents	ISI	目次速報サービス (図書館では理工系の5部門を提供)
2	MEDLINE	National Library of Medicine	医学・薬学文献情報サービス
3	Pub-Med	National Library of Medicine	医学・薬学文献情報サービス
4	CA on CD, CI on CD	Chemical Abstracts Services	化学、生化学、物理等幅広い科学技術分野の情報を収録
5	NACSIS-ELS	学術情報センター	学協会の発行する学術雑誌を画像データとして蓄積し、提供
6	NACSIS-IR	学術情報センター	COMPENDEX PLUS, 研究者ディレクトリ等の59種のデータベース JOIS 検索が可能 (Academic Price)
7	NACSIS Webcat	学術情報センター	国内大学図書館を中心とした総合目録サービス
8	DIALOG	Knight-Ridder Information	ERIC, PsycINFO 等のデータベースサービス
9	JOIS	科学技術振興事業団	JICST-E 等の国内文献情報サービス
10	STN International	FTZ Karlsruhe, JICST, CAS	Chemical Abstract, INSPEC 等のデータベースサービス CAS FILES のダイレクト検索は大学割引制度 (割引率80%) を適用 WWW 版 STN Easy も大学割引制度適用
11	CASTOR	東京大学大型計算機センター	CAS 発行の CA Search 及び Condensates のサービス 1976年～
12	UnCover	UnCover 社	雑誌目次速報とドキュメントデリバリーサービス

	料 金	検 索 方 法	利用方法	支払方法	U R L
1	有 料	ダイレクト検索	図書館へ申込	校費振替	http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/erl/
2	有 料	ダイレクト検索	図書館へ申込	---	http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/erl/
3	無 料	ダイレクト検索	WWW	---	http://www.ncbi.nlm.nih.gov/PubMed/
4		ダイレクト検索	図書館へ申込	---	
5	有 料	ダイレクト検索	直接利用申請	---	http://els.nacsis.ac.jp
6	有 料	代 行 検 索	図書館へ申込	校費振替	http://www.nacsis.ac.jp/ir/ir-j.html
	有 料	ダイレクト検索	直接利用申請	校費支払/月	
7	無 料	ダイレクト検索	WWW	---	http://webcat.nacsis.ac.jp/
8	有 料	代 行 検 索	図書館へ申込	校費振替	http://dialog.krinfo.com/
	有 料	ダイレクト検索	利用契約	私費支払/月	
9	有 料	代 行 検 索	図書館へ申込	校費振替	http://www.jst.go.jp/JICST/
	有 料	ダイレクト検索	利用契約	校費支払/月	
10	有 料	代 行 検 索	図書館へ申込	校費振替	
	有 料	ダイレクト検索	直接利用申請	校費支払/月	
11	有 料	ダイレクト検索	直接利用申請 本学総合情報処理 センター受付可	校費支払	
12	無 料	ダイレクト検索	WWW	---	http://www.carl.org/
	有 料	ダイレクト検索	利用契約	私費支払/月	

問合せ先：情報サービス課学術情報係 内線 6151 ダイヤルイン 0886-56-7589 e-mail: info@lib.tokushima-u.ac.jp



附属図書館所蔵絵図の画像データ公開

平井松午

「すだち」(図書館報) No.56 で本館が所蔵する「近世古地図・絵図コレクション」の概要について紹介したが、このたび、所蔵絵図の一部が学内特別教育研究費によって高精度画像データ化されたので、その意義について解説しておきたい。対象となった絵図は阿波国絵図2点、淡路国絵図2点、それに徳島城下絵図1点と勝浦郡分間絵図の計6点で、これらの絵図の画像データは、本館に新たに設置されたマルチメディア・プラザのパソコンで、簡単に立ち上げて閲覧することができる。

6点の絵図は比較的大型で、うち最も大きい阿波国絵図は畳4.5枚分の広さにもあたる。絵図の中には資料的価値が高いにもかかわらず、図幅が大きいため、これまであまり研究活用されてこなかったものも少なくない。その代表例が国絵図であろう。3寸1里(約1/21,600)～6寸1里(約1/43,200)に縮尺されているとはいえ、一国仕立ての国絵図の場合、折り畳んである厚手の図面を研究者1人で広げ、その膨大な情報量を正確に把握するには多大な労力と時間を要したからである。

このように、絵図についてはこれまで、人手や閲覧室のスペース、あるいは資料の保管・保存といった物理的な問題などから、閲覧自体が制約されてきた場合も少なくなかった。そうした意味で、今回本館が行った所蔵絵図の画像データ化は以下の点で画期的ともいえる。

その第1は、資料保存という観点からである。調査研究のためではあっても、折り畳んでいる絵図を広げるたびに、絵図は折り目の部分を中心に劣化していく。また、絵図の中には虫食いや破損がひどく、広げることがほとんどできないものもある。画像データでの絵図情報の提供は、原本管理という意味で資料保存につながる

ことはいうまでもない。

第2は、調査研究活動における利便性の提供である。研究者にとって、絵図複製に際しての関心事の第一は、記載内容が判読可能かどうかということである。本館でもすでに、徳島関係の絵図約50点については複製図を作成しているが、大型絵図になると記載文字はほとんど判読できない。今回の絵図画像データは1鋪の絵図を8×10カメラで分割撮影してコンピュータ上で合成したものであるが、1鋪の絵図について約150MB容量の高精度画像として復原されているので、ほとんど原本と同じように実見することができる。さらに、画像ソフト(フォトショップ)を用いて自由に絵図を拡大・縮小でき、細部を相当にズームアップしても、画像・文字情報は鮮明に読みとれる。また、色調調整によって読みにくい箇所の判読や作製技法の解明が可能となる点で、研究上の汎用性はきわめて高いといえる。

第3に、画像情報の公開あるいは提供が可能になったことである。最近更新された附属図書館のホームページ上にも、上記6点の絵図の画像データを「貴重資料」として公開(100KB前後)しているが、これによって、全国の研究者からのアクセスが可能となった。岡山大学附属図書館池田家文庫や国立歴史民俗資料館をはじめとして、最近ではWWW上で史料目録や絵図データを得ることが容易になってきたが、本館のように、さらに詳細な絵図高精度画像データを提供できる機関はまだ少ないように思われる。今後、こうした絵図・文書史料の画像データ化のニーズが高まることは確かである。本館に所蔵されている残り約200点の絵図についても、早期に事業化されることが望まれる。

(ひらい しょうご・総合科学部教授)

ちようりゆう

図書館ホームページ開設

附属図書館では「すだち」No.58 で案内をしましたように、昨年10月にホームページの試行版を開設していましたが、平成10年度から全面的に内容を改め公式版としてスタートしました。デザイン及びコンテンツの作成とHTML化は情報サービス課を中心に図書館職員が分担をして行いました。詳細は本誌記事を参照してください。

マルチメディア・プラザ オープン

平成10年4月16日附属図書館の2階にマルチメディアパソコン10台を設置したマルチメディア・プラザを開設し、オープニングセレモニーが開催されました。オープン後、写真のように学生を中心に活況を呈しています。詳細は本誌記事を参照してください。

CA & CI オンラインサービス開始

附属図書館では平成9年度CAサーバシステムを導入し、10年度から1997年以降のCA on CD (Chemical Abstracts)、第12回(1987-1991)及び第13回(1992-1996)のCI on CD (Collective Index) のオンライン検索サービスを開始しました。詳細は本誌記事を参照してください。

貴重書の高精度画像データ公開

平成9年度学内教育改善推進経費の配分により、貴重資料のうち阿波・淡路国地方の大型絵図など6点の高精度画像データを作成しました。これらはマルチメディア・プラザのパソコンで閲覧できます。利用者用に詳細なマニュアルも備えており、本学関係者だけでなく学外者にも好評です。本誌の平井教授の記事を参照してください。



マルチメディア・プラザ

学術情報に関する講演会を開催

—文献・引用・図書館：ユージン・ガーフィールドの仕事—

平成9年12月5日『科学を計る』の著者でSCI(Science Citation Index)の考案者ガーフィールド博士と親交の深い科学技術評論家窪田輝蔵氏を招き、学術講演会を開催しました。当日は学内教職員や県内の大学図書館関係者約60人が熱心に聴講しました。講演の内容はライフサイエンスの分野で不可欠の文献検索サービス、サイテーション・インデックスとそれに基づくインパクト・ファクターに関するもので、本誌記事に掲載してあります。なお、前日の4日蔵本キャンパスにおいて、研究者を対象とする窪田氏の講演会「科学とジャーナル」が開かれ、歯学部大講義室が満員となる盛況でした。

図書館利用案内を刷新

平成10年度より図書館利用案内を刷新しました。A4版のパンフレット形式で学内者用、学外者用、留学生のための英文版の3種類を附属図書館、蔵本分館についてそれぞれ作成しました。これらは美しいソフトカラーを使って色分けしています。

学部学生も入庫可能

平成9年12月より学部学生も「図書館利用証」を提示すれば本館の書庫を自由に利用できるようになりました。図書館の書庫には学術雑誌などの資料が配架されており、活用されています。

身障者用閲覧機を増設

平成9年度末に身障者用機を増設し、本館3階閲覧室にも設置しました。そのほか閲覧室の椅子、ブックポスト等も更新しました。

貴重書を指定

附属図書館では平成9年度「徳島大学附属図書館貴重資料指定基準」「同取扱要領」を整備しました。これにより、附属図書館所蔵コレクションのうち「蜂須賀家家臣成立書並系図」1,802点と「近世古地図・絵図」201点が貴重書に指定されました。

前者は徳島藩主蜂須賀家所蔵の藩士の勤書と家系図です。後者は江戸時代に作成された阿波国(徳島県)・淡路国(兵庫県淡路島)をはじめ、江戸・京都・その他諸国の古地図・絵図類を収集したもので、いずれも学術的・文化的価値の高いものです。特に大型美麗の幕府撰国絵図、著名な伊能忠敬自筆の桐箱に納められた伊能図4種類はきわめて重要です。

学外者の利用申請を簡素化

平成10年度から一般市民等の学外利用者の利用申請が簡素化され、利用申請証に記載後、身分を証明するもの(運転免許証等)を提示するだけで当日から利用できるようになりました。学外利用者専用の利用者IDでマルチメディア・プラザのパソコンについても利用が可能です。

医療短大看護学科

オリエンテーション実施

平成9年度から、看護学研究の文献指導を、看護学概論の一環として、蔵本分館の職員が指導することになりました。参加学生80名を対象として平成10年1月14日(水)はMEDLINEを中心に、医学中央雑誌の解説を行い、1月19日(月)と1月22日(木)の両日は、それぞれ1時間30分の実習(MEDLINE, OPAC、医学中央雑誌)及び図書館の資料案内、文献の利用目的・方法を説明しました。



蔵本分館閲覧室の照明を増設

昨年末に分館閲覧室の書架の照明が増設され利用者から大変好評です。

医学中央雑誌 CD-ROM 版のサービス改善

蔵本分館では平成9年度臨床系医師及び看護学研究者や学生に活用されている医学中央雑誌 CD-ROM 版（12枚）の端末機を更新し、チェンジャーは写真のように新しくタワー型ドライブを採用しました。これにより、検索が簡便かつ迅速にできるようになり、利用も増加しています。



図書館広報に関する運用規定を整備

附属図書館では、平成9年度、広報活動の推進を図るため「徳島大学附属図書館広報委員会規約」「同館報発行要領」(改正)「インターネットによる広報実施要項」を整備しました。

学術情報センター利用説明会開催

—新 CAT/ILL 及び電子図書館サービス—

平成10年2月19日、附属図書館において、中四国地区の図書館職員、大学の研究者を対象に学術情報センターの主催による標記の講習会が開催され、約60名が参加しました。

電子図書館サービス (NACSIS-ELS) は、国内の学会発行の学術雑誌185タイトルの全文テキストデータベースで、書誌検索と雑誌コンテンツの画像とを統合した画期的なシステムです。

新CATに関しては、国立大学図書館協議会が開発した“CATP-Auto” (新CAT自動登録システム) 及び京都大学開発の新CATクライアントのデモと説明が行われ、参加者の強い関心を集めました。

中国四国地区大学図書館協議会開催

平成10年4月23日第46回中国四国地区大学図書館協議会総会 (参加者108名)、翌24日第25回国立大学図書館協議会中国四国地区協議会が本学の当番館で開催されました。23日全体会議では利用者教育に関する協議等が行われ、その後国公私大別の館長会議と国公私合同の事務部課長会議が開催されました。

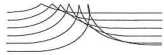
24日は国立13大学の館長・部課長により、事務一元化への図書館の対応、学生用図書の実方策、電子ジャーナルの利用サービス等、8つの協議題について意見交換が行われました。

本学教官著作寄贈図書

寄贈者	著者名	書名	寄贈者	著者名	書名
東 潮	徳島県海部郡海南町教育委員会編	阿波海南大里2号墳発掘調査報告書	光田 基郎	光田 基郎	散文理解における知識利用の発達とその教授活動に関する実験的研究
東 潮	白石太一郎 他	古墳時代の考古学	村田 明広	村田 明広 他	構造地質学
大島 敏久	大島 敏久	酵素のおはなし	渡邊 恵子	渡邊 恵子	英米文学の名作を知る本
高橋 晋一	高橋 晋一	台湾美麗島の人と暮らし再発見	高杉 益充	高杉 益充	消毒剤 —基礎知識と臨床使用—
高橋 晋一	高橋 晋一	日和佐八幡神社祭礼 徳島の結婚	高杉 益充	高杉 益充	薬剤識別コード辞典 平成10年改訂版



会議



●学内

- 10. 6 第4回附属図書館運営委員会
 - 学内設備充実費（案）について
- 12. 1 第5回附属図書館運営委員会
 - 学生用図書費等（文部省・第二次配分）の配分（案）について
 - 附属図書館の将来計画について
- 2. 16 第6回附属図書館運営委員会
 - 附属図書館将来計画について

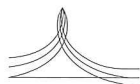
- 平成9年度附属図書館運営費等節約について
- 附属図書館広報委員会（仮称）の設置について
- 2. 16 第2回館報編集委員会
 - 附属図書館報No.59の発行について

●学外

- 10. 16～17 平成9年度国立大学図書館協議会中国四国地区協議会実務者会議（於：香川医科大学）
- 10. 28 学術雑誌総合目録欧文編1998年版全国調査説明会（於：岡山大学）
- 10. 30～31 第33回日本医学図書館協会中国・四国地区部会総会（於：島根医科大学）
- 11. 30 平成9年度中国四国地区国立大学図書館事務（部・課）長会議（於：広島大学）

- 12. 10～12 大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化に関する国際セミナー（於：学術情報センター）
- 1. 22 平成9年度国立大学附属図書館事務部長会議（於：静岡大学）
- 3. 17～18 大学図書館電子図書館化推進連絡会議（於：学術情報センター）
- 4. 23～24 第6回中国四国地区大学図書館協議会総会（当番：徳島大学）

研修



- 11. 5～7 平成9年度徳島地区国立学校係長研修（於：鳴門教育大学）
 参加者：吉田 敬治 前田あつこ
- 11. 11～14 平成9年度大学図書館職員講習会（於：大阪大学）
 参加者：揚野 敏光

- 11. 17～19 平成9年度徳島地区国立学校中堅職員研修（於：徳島大学）
 参加者：小松 美樹
- 12. 11 徳島県大学図書館協会研修会（於：鳴門教育大学）
 参加者：吉田 敬治 横川 紀子
 笹賀 瑞枝 原井 美紀

編集後記



今春、明石大橋が開通し、徳島も本土と直結しました。巻頭の館長のメッセージ、そして本誌記事からも感じていただけますように、本学図書館も、電子図書館に向けて本格的な歩みを始めました。

インターネットに自ら飛び込んで現実の世界の情報革命を肌で感じてほしい、マルチメディア・プラザはそういう図書館職員の夢をのせています。

窪田輝蔵氏は講演で、話題の『奪われし未来』の著者の一人、シーア・コルボーン女史が57才で学

位を取得、数千編の科学文献を読み世界的な発見を得た“読むことに関するとりつかれた情熱”を紹介しました。こうした科学者の知的体力を支えるのは、図書館サービスのサイドからは文献に対するアクセスの提供です。M.K. バックランド博士のいう電子図書館機能を活用した図書館サービスの再構築へ向けて、われわれのチャレンジはこれからも続きます。皆様方のご理解、ご協力をお願いいたします。

（情報サービス課長 中野）

徳島大学附属図書館報「すだち」No.59
 1998年6月30日
 編集館報編集委員会
 発行 徳島大学附属図書館

<表紙デザイン・レイアウト> 清水 國夫
 〒770-8507 徳島市南常三島町2丁目1番地
 TEL(0886)56-7584
 FAX(0886)56-9016

